外国語の濫用は文化の衰退（２００３・７・４）

「近年の観光ニーズの変化を踏まえ、自然を題材にしてインタープリターの解説を受けながら、自然の不思議さや面白さを味わうインタープリテーション・プログラムの造成を推進するため、インタープリターを育成するためのセミナーを開催、事業経営マニュアルの作成などをおこなった」

これは『平成一四年度観光の状況に関する年次報告』の一部であるが、難解であるとともに、意味不明の仮名文字が散乱していることでも悪文の見本である。「ニーズ」は「需要」で十分であるし、「インタープリター」は「案内役」のほうが理解できるし、「セミナー」も「講習会」、「マニュアル」も「手引書」で問題はない。「インタープリテーション・プログラム」はそもそも意味不明であるが、憶測すれば「案内付き観光」のようである。

これまでも政府の発表する文書に仮名文字が多いという批判はあり、閣議での閣僚の説明に小泉総理大臣が批判をしたことも新聞記事になっている。このような動向を反映して、国立国語研究所では「外来語委員会」を組織して、本年四月に氾濫する外国語を日本語に置き換える提言を発表した。そこでは六二の外来語が列挙され、一般の人々に理解できる日本語に置き換える事例を添付している。

いくつかを紹介すると、国際会議などで使用される「アジェンダ」は「検討課題」、情報通信技術の解説に頻出する「インタラクティブ」は「双方向的」、企業経営の流行になっている「アウトソーシング」は「外部委託」、狂牛病で有名になった「トレーサビリティ」は「履歴管理」、郵便事業の民営移行で話題になった「ユニバーサルサービス」は「全国均質なサービス」などである。

外来語をそのまま安易に使うことも問題であるが、さらに問題なのは和製英語である。もともと外国から輸入された野球やゴルフでは和製英語が氾濫している。「ナイター」は「ナイトゲーム」と言わなければ通用しないし、セーフティバントも英語ではない。傑作は「トンネル」であり、これは逆輸出したほうが英語の「ゴー・スルー・フィールダーズ・レッグズ」より明快かもしれない。

ゴルフでも「ナイスオン」は「グッドショット」とでも言わないと通じないし、「ニアピン」も「クローゼスト・ツー・ザ・ピン」が正式の表現である。国内で通用すればいいのではないかという意見もあるかもしれないが、「ノータッチ」など、そもそもゴルフの基本精神に反するような日本での慣行から作られた和製英語は、東洋の島国ではゴルフに似たゲームが流行しているということになりかねない。

明治時代には欧米の文化を大量に輸入したから、多数の外来語も入ってきたが、和魂洋材の精神で巧妙に名訳が作成されている。野球の用語である「四球」や「投手」は東京帝国大学で野球に熱中していた正岡子規の翻訳といわれているし、「芸術」や「情報」はアートとかインフォメーションに含まれる複雑な意味を的確に表現しているということでは翻訳の手本のような日本語である。

これから発展していく情報社会では、画一な技術が浸透していくなかで多様な文化を維持していくことが重要であるが、その文化の基礎となるものが言葉である。その言葉について無神経な外来語の濫用は固有の文化そのものの衰退に影響する。和魂洋材の精神を再度思い起こしてみる必要がある。